ナーナイ関係邦語文献紹介

津 曲 敏 郎

日本の北方，サハリンから大陸のアムール川流域，さらにその北の広大なシベリアには「ツングース」と総称される先住民がいる。その一つがアムールの水とタイガの森の恵みに拠って暮らしてきたナーナイ(naanai＝土地の人)と呼ばれる人々である。今世紀はじめ，ロシア人V.K.アルセーニエフ（1872—1930）の沿海州探検の案内人として活躍したのがゴリド（ナーナイの旧称）の猟師デルス・ウザーラであった（ただし彼をウデヘとする見方もある：加藤1986：412参照)。彼の名は，すぐれた作家でもあった探検家自身の旅行記（長谷川訳1965）と，それに基づく黒沢明監督の映画化（1975）によって知られている。

1989年冬と翌年夏，われわれはアルセーニエフが初代館長をつとめたハバロフスク郷土博物館の協力を得て，ナーナイを中心とするアムール流域のツングース言語文化調査を実施した。今回の講演会（小樽商科大学国際先住民年記念講演会「北方先住民の過去と現在」1993年10月29—31日，小樽）では，その中からナーナイの伝統的な文化と現在の姿をスライドで紹介した。伝統文化の保存と復興はどの民族にあってもそれぞれに深刻な問題であるが，ナーナイでは伝統文化の伝承者と並んで，民族出身のすぐれた芸術家（画家，工芸家，作家）や知識人（学者，民間研究者）が人々の尊敬を集め，自分たちの文化に対する自覚と誇りを呼び起こしている。このことが民族主体の伝統文化保存・復興の動きに大きな役割を果たしていることを，いくつかの実例をとおして報告した。

当日の報告の具体的内容についてはすでに活字になっている部分も多いので，ここでは参照文献を紹介することで，紙上での報告に代えたい。あわせて不完全ながらナーナイ関係文献解題の試みとしたい。ただし原則として近年の邦語文献に限ることとする（一部，日本人による外国語文献を含む)。なおロシア語による基本的文献のうち，民族学関係のものは加藤（1986）に見出せよう。日本人による戦前の先駆的研究についても同書の文献目録を参照されたい。津曲（1989）にはナーナイ語のごく基本的な辞書・文法書があがっている。中国語文献目録としては谷野(1991)参照。

19世紀初頭，間宮林蔵（1780—1844）が樺太から大陸に渡り，アムール下流域を訪れている。その探検行を記した『東韃地方紀行』の中にコルデッケという名が登場するが，これはゴリドすなわちナーナイをさすとみられている。同書については洞・谷澤編注（1988)，大谷訳（1981）などの簡便な形で見ることができる。林蔵やその他の江戸時代の日本人による，ツングースを含む北方諸民族の観察記録については加藤（1986）に詳しい。

現在のナーナイの状況報告としては津曲(1993 c)を参照されたい。そのもととなったアムール流域のフィールド調査の概要は，黒田・津曲・佐々木（1991)，津曲（1992）参照。佐々木（1990)，風間(1992)もフィールドの息吹を伝えている。中国領に分布するナーナイを中国ではヘジェ（赫哲：ヘジェン，ホジェンなどとも）と呼ぶが，その言語調査に関する随筆的記事として一ノ瀬(1991)，津曲（1993 a)，ルポルタージュとしてNHK取材班（1988）がある。同書には解説とし

て，大塚（1988）も併録されている。北海道新聞社編（1991）はかつての山丹交易を追いながらロシアと中国双方のナーナイをルポしている。

歴史的背景については三上・神田編（1989）の随所にナーナイへの言及がある。特に同書中の池上（1989）では，言語の面からみたアムール下流域の歴史が論じられている。いっぽう佐々木（1991 a）はナーナイの氏族（hala）の来歴を考察している。ナーナイをめぐる現代史の断面として志賀（1986）参照。

言語についての概観は津曲（1989）で得られよう。津曲（1993 b）は中国領のナーナイ語（ヘジェン語）をロシア領のものと類型的に比較し，その形態的差異を明らかにするとともに，満州語の影響を論じたものである。ナーナイ語と満州語の言語接触の問題については池上（1993）も参照。いっぽう Hikita（1991）は，概括的ではあるがナーナイ語に対するロシア語の影響に触れている。日本語で書かれたナーナイ語に関する具体的論考はまだ少ないが，風間（1994）はナーナイ語やその他のツングース語に見られる文法的「一致」の問題を扱っている。池上（1987）はナーナイ語諸方言と近隣のツングース諸語の比較を含む。辞書は今のところロシア語との対訳に頼らざるを得ないが，風間（1993 a）はそうした辞書の記述からもれているものも含めて動植物語彙を補う試みである。

豊富な口頭文芸のうち，いくつかの民話が風間（1991，1993 c）によって日本語訳とともにテキスト化されており，民族資料・言語資料として貴重である。日本語訳だけならば，斎藤（1988，1993），サンギ編/匹田訳（1992）にもシベリア諸民族の民話とならんでナーナイのものが含まれている。なお小長谷（1991）にはナーナイの民話への言及とならんで，隣接するウデへの天の川起源譚の翻訳紹介があるので，大林論文（本号参照）との関連で参照されたい。なぞなぞについては池上（1984）のほか，風間（1993 b）にも短い紹介がある。韻を踏んだ早口ことばの一例として津曲（1990）。また Tsumagari（1991）は子守歌のテキスト分析である。

そのほか，伝統的遊戯に関するナーナイ自身による記録を編訳してロシア語原文（ナーナイ語の単語を含む）とともに紹介したものとして，キレ/佐々木・匹田・津曲編訳（1993）がある。いっぽう佐々木（1991 c）では伝統的信仰の一形態として，ミオ（mio＜廟）と呼ばれる聖像画ないし護符が取り上げられている。衣装，容器，壁掛けなどにほどこされた装飾文様については，佐々木（1991 b）で写真とともに解説がなされている。

なお講演会での下村報告（本号参照）に関連して付言すると，ナーナイにもムエネ（muənə）と呼ばれる口琴がある。金属性で指で直接リードをはじく。89 年の調査の際，ナーナイの老人（上記のキレ氏）から譲り受けた実物は，現在網走の道立北方民族博物館に収められている（北海道立北方民族博物館編 1993：48 に写真）。いっぽうヘジェ族の口琴は楊（1992）の報告によればムカンジ（mukangji 表記は楊のまま）と呼ばれる。同報告にはヘジェの歌と踊りが概説されている。

ナーナイ文献目録

アルセーニエフ, V.K. / 長谷川四郎　訳　1965『デルスウ・ウザーラ：沿海州探検行』，平凡社　東洋文庫，東京.

池上二良　1984「ツングースのなぞなぞ」柴田武他編『世界なぞなぞ大事典』pp.47—55，大修館書店，東京.

———　1987「アムール川下流地方と松花江地方：『満州』の語源にふれて」『東方学会創立四

十周年記念東方学論集』pp.45—55，東方学会，東京.

_____ 1989「東北アジアの土着言語」「東北アジアの言語分布の変遷」三上・神田編（1989）所収，pp.126—161.

_____ 1993「満州語方言研究における穆嘩駿氏採集資料について」中嶋幹起編『シンポジウム 満州語の言語学的・文献学的研究』（言語文化接触に関する研究５）pp.１—24，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，東京.

一ノ瀬　恵　1991「二人のヘジェ老人」『月刊言語』20/６，pp.２—３，大修館書店，東京.

NHK取材班　1988『秘境興安嶺をゆく』Ⅰ，日本放送出版協会，東京.

大谷恒彦　訳　1981『東韃紀行』，教育社新書，東京.

大塚和義　1988「中国・黒竜江流域の少数民族」NHK取材班（1988）所収，pp.195—243.

風間伸次郎　1991「ナーナイ語テキスト」黒田・津曲編（1991）所収，pp.61—134.

_____ 1992「激動の国での静かな暮し」『Arctic Circle 北海道立北方民族博物館友の会・季刊誌』２，pp.12—14，北海道立北方民族博物館，網走.

_____ 1993ａ「ナーナイ民俗語彙ノート(1)」『北海道立北方民族博物館研究紀要』２，pp.37—44，北海道立北方民族博物館，網走.

_____ 1993ｂ「ツングース語」柴田武編『世界のことば小事典』pp.286—289，大修館書店，東京.

_____ 1993ｃ『ナーナイ語テキスト』（ツングース言語文化論集４），小樽商科大学言語センター，小樽.

_____ 1994『ナーナイ語の「一致」について』（北大言語学研究報告５），北海道大学文学部言語学研究室，札幌.

加藤九祚　1986『北東アジア民族学史の研究：江戸時代日本人の観察記録を中心として』，恒文社，東京.

キレ，ポンサ・K.／佐々木史郎・匹田剛・津曲敏郎　編訳　1993『ナーナイの民族遊戯』（ツングース言語文化論集２），小樽商科大学言語センター，小樽.

黒田信一郎・津曲敏郎　編　1991『ツングース言語文化論集１』（文部省科研成果報告書２），北海道大学文学部，札幌.

黒田信一郎・津曲敏郎・佐々木史郎　1991「北東アジア・ツングース系諸族の言語文化の実地研究」『学術月報』44/４，pp.14—19，日本学術振興会，東京.

小長谷有紀　1991「アムール河流域諸民族の民話」黒田・津曲編（1991）所収，pp.41—50.

斎藤君子　編訳　1988『シベリア民話集』，岩波文庫，東京.

_____ 1993『シベリア民話への旅』，平凡社，東京.

佐々木史郎　1990「ナイヒン村のゴルバチョフ」『月刊みんぱく』14/６，pp.15—17，国立民族学博物館，大阪.

_____ 1991ａ「アムール川下流域住民の民族構成の研究に関する覚え書き」『民博通信』51，pp.36—56，国立民族学博物館，大阪.

_____ 1991ｂ「アムール川下流域諸民族の装飾文様」『民族藝術』７，pp.61—72，日本民族藝術学会，講談社，東京.

_____ 1991ｃ「ナナイにおけるミオ信仰について」黒田・津曲編（1991）所収，pp.23—28.

サンギ，V.編／匹田紀子　訳　1992『天を見てきたエヴェンク人の話：シベリアの伝説と神話』，

北海道新聞社，札幌.
志賀　勝　1986『アムール　中ソ国境を駆ける：満州シベリア鉄道紀行』，研文出版，東京.
谷野典之　1991「中国北方少数民族に関する中文文献目録」黒田・津曲編（1991）所収，pp.29—39.
津曲敏郎　1989「ナーナイ語」亀井・河野・千野編『言語学大辞典』第2巻，pp.1457—1460，三省堂，東京.
_____　1990「満州語のことば遊び」江口一久編『ことば遊びの民族誌』pp.97—105，大修館書店，東京.
_____　1992「アムール流域のツングース調査」『北海道民族学会通信』91/1・2，pp.7—8，北海道民族学会，札幌.
_____　1993 a「中ロ国境にヘジェ語を訪ねて」『言語センター広報　*Language Studies*』創刊号，pp.85—87，小樽商科大学言語センター，小樽.
_____　1993 b「ヘジェン語の形態的特徴と満州語の影響」岡田宏明編『環極北文化の比較研究』（文部省科研成果報告書）pp.81—92，北海道大学文学部，札幌.
_____　1993 c「ナーナイ」綾部恒雄監修・信濃毎日新聞社編『世界の民：光と影』上，pp.86—94，明石書店，東京.
Tsumagari, T.　1991 〝Two Nursery Songs in Nanay〟　『人文研究』81，pp.119—133，小樽商科大学，小樽.
Hikita, G.　1991 〝Nekotorye primery vlijanij russkogo jazyka na severnye jazyki (itel'menskij, aleutskij i nanajskij jazyki)〟　黒田・津曲編（1991）所収，pp.51—60.
北海道新聞社　編　1991『蝦夷錦の来た道』，北海道新聞社，札幌.
北海道立北方民族博物館　編　1993『北海道立北方民族博物館総合案内』，北海道立北方民族博物館，網走.
洞　富雄・谷澤尚一　編注　1988『東韃地方紀行他』，平凡社東洋文庫，東京.
三上次男・神田信夫　編　1989『東北アジアの民族と歴史』，山川出版社，東京.
楊　志軍　1992「赫哲族の歌と踊り」谷本一之編『北方諸民族芸能祭報告』pp.77—82，北方諸民族芸能祭実行委員会（北海道教育大学内），札幌.